

2

---

# 東南アジア大陸部の 精霊信仰と上座仏教

---

池上 要靖

---

身延山大学教授  
山梨県智寂坊住職

---

## 1. はじめに

身延山大学仏教学部の池上要靖と申します。最初に、私の専門分野の説明をさせていただきます。本来は初期仏教を研究しておりました。身延山大学にて教鞭を執るなかで、東南アジアの仏像修復プロジェクトに係わる時期と、私が現在の東南アジア仏教の研究を行いたいと思っていた時期が重なり、それから22～23年間、それらの研究をしてきました。そのような経過で今日の発表の場を頂いているということです。

## 2. 発表の前提

私が所属している学会の中に「パーリ学仏教文化学会」があります。そして「東南アジア学会」にも所属しているのですが、これらの専門性が高い学会においても、東南アジアの大陸部、主にラオス仏教研究となりますと、研究者の人数がかなり絞られてしまいます。しかも、その中で精霊の研究をしている方となりますと、私の知る限り、日本人ではたった1人しかいません。しかも、その方も本当の専門分野はタイのイサーン（東北タイ）と北タイ地方に研究の中心がある先生です。ですので、ラオスの仏教と精霊の研究というのは、ほとんど手がついていない状態が基本にあるということをご認識して頂けたら幸いです。

## 3. 東南アジアとは

東南アジアというのは大陸部と島嶼部の2つに分けられます。大陸部というのは、インドシナ半島を意味します。島嶼部は、当然群島や大きな島々が中心となります。よく知られているところでは7000の島からなるフィリピン共和国、大陸部と島嶼の両方にまたがるマレーシア、そして世界最大の島嶼を抱えるインドネシア共和国などが挙げられます。ですから、東南アジアを大きく2つに分けると、大陸続きの半島部と島として孤立している島嶼部となります。地理的な視点では、島嶼部は日本と同じような概念で捉えることができると考えていいかもしれません。そして大切なことは、日本もそうであるように、非常に豊かで多彩な文化形態があるということです。豊かな文化形態があるということは、深く掘り下げようと思えばどこまでも掘り下げられ、底が見えないためにるつぼにはまってしまうこともあるということです。ある文化人類学の先生で、島嶼部のある部族の研究を行っていたところ、

るつぼへはまってしまい、その部族の女性と結婚して今では村の副村長になっています。ですから、そういった意味では、奥の知れない、奥底が見えない東南アジアだということを認識頂ければと思います。

#### 4. 「精霊」と自然崇拜

本日の講題において大前提となるのは「精霊」、「せいれい」と読むか「しょうりょう」と読むか。私たち僧侶は「しょうりょう」と読むのがふさわしいと考えますが、この言葉から導き出される概念について触れていきます。それをもとにして、東南アジア大陸部を2つの文化圏に分けました。1つは、今軍政で問題となっているミャンマーです。もう1つは、インドシナ半島でもタイ・ラオス・カンボジアの3国に関しては、ある程度同じ共有されている文化圏をもっているのです。ここでの「靈魂」の扱い方、そしてそれらに共通するのが上座仏教ということになります。タイやラオスで行われている魂を救済する儀式（ヴァーシー・スークワン）を取り上げて、これをケーススタディとしてまとめさせていただきます。

まず「精霊」という漢字をなんと読むか。その前に「せいれい」には、「精霊」と「聖霊」の2つの漢字がありますが、ここでは「精霊」が適切な漢字となります。ただし、今インターネットを介してHTML画面上で「せいれい」と打った場合、変換すると「聖霊」が先に候補として出てきます。ですので、必ずしも「聖霊」が誤りであるというわけでもないようです。少なくとも私たちの認識では、「聖霊」こちらはキリスト教的な三位一体を表す言葉ですから、「せいれい」と読むのは間違いないと思います。東南アジアとの関係を語ることもできますが、本日はこちらには触れません。したがって、本日はこちら「精霊」について話していきたいと思います。「精霊」を「しょうりょう」と読む方について、こちらは仏教読みなので、異論がある方はいないと思います。世間一般的には「せいれい」と読む方もいます。こちらに関しては、哲学・民俗学（文化人類学）・宗教学などの素養をもっている方は「せいれい」と呼びます。特に、民俗学（文化人類学）の方は、あえて「しょうりょう」とは呼びません。仏教との混同を避けるためだと言っております。なぜ避けなければいけないかというと、東南アジアにおいて「せいれい」と読む場合、仏教以前から存在する民間信仰としての「精霊」があるからです。なので、仏教読みである「しょうりょう」をあえて使用しないという言い方をされます。どちらでもいいとは思いますが、「使わない」というのであれば、こちらから「使え」とも

言えません。ですから、東南アジア学会などに参加すると、使っている漢字が同じであっても読み方が違う場合があるので、違和感を覚えることがあります。それでは、本来であれば「しょうりょう」と読みたいところですが、今日は、あえて「せいいい」と読みながら話を進めさせていただきます。

「せいいい」と読む文化人類学は、非常に幅が広いのですが、日本人で「精霊」を「せいいい」と読んで研究をしていたもっとも著名な方といいますと、民俗学者の柳田国男先生ということになります。柳田先生の定義では、「セイレイ」とは「人間の生活領域（山、森、湖、樹木、海、水、寺社など）との境域において活動するナニモノか。」としています。ここでは、あえて「境域」という言葉を使わせていただきました。この境域とはボーダーとも言われます。境界域にある人たち、まさしくそれが東南アジアの人たちであるということを理解いただけたらと思います。その理由については、これから説明していきます。柳田先生ですが、結局その境界域に棲むモノはなにかということで、「妖怪、モノノケ、～カミなど。」といったような表現をしています。これに関しては『遠野物語』を読んでいただけたら明確に表れてくる言葉の定義かと思います。このようなことを踏まえ、一歩進み、民俗学ではなく『文化人類学辞典』では、「物質的身体を持たずに、何らかの人格性を有する超自然的存在の中で、超人間的能力を以て人間生活に善悪それぞれの影響を与えると信じられているもの」とされています。高度な言い回しになっておりますが、要するに、物質的な体を持っていないが、超自然的な体を持っており、その体に見合った能力を用いて私たちの生活に関与してくる。私たちはそれに善悪の判断をしてレッテルを付けてしまうような存在、善いモノ・悪いモノと言ったように考えてしまう存在である。これが現在の『文化人類学辞典』で定義されている「セイレイ」となります。どうでしょう、この説明でシックリくるでしょうか。

これに対して、「ショウリョウ」と読む仏教学の定義では、広く一般的に使われている『仏教辞典』（岩波）から引用しますと、「精神・神識・霊・精ともいわれ、一般的には死者の靈魂のこと。無我を説く仏教では実体的な靈魂を認めなかったが、仏教が流布される中で、むしろ民間信仰に影響され、受け入れられた考え方。」となります。「民間信仰に影響され受け入れられた」と言うことは、先ほどの文化人類学の先生方が言っていた、「仏教以前からあった民間信仰」という考え方が納得のいくものになるのではないのでしょうか。では、ここに出てきた「死者の靈魂」の「靈魂」とは何なのか、「靈魂」と「ショウリョウ」とは違うのかをみていきたいと

思います。仏教学の基本概念では「身体の中にあり、そこから遊離すると信じられる不可視の存在。霊・魂（たましい、たま）ともいわれ、命や心の別名ともされる。仏教では、無我説の立場上靈魂の存在を否定したが、やがて死後の輪廻する存在としてのプドガラ（補特伽羅）を認める議論が表れた。…」となります。ここに「無我説の立場上靈魂を否定した」とありますが、これは初期仏教の考え方です。ところが、部派仏教の時代となると、徐々に靈魂の存在を承認していく傾向が出てきます。そして、その傾向というのが、「死後に輪廻する存在としてのプドガラ（補特伽羅）がある」という考え方が、今のインド学仏教学研究の間で議論されています。つまり、ここで定義された「靈魂」を、私たちが普段から考えている霊とか魂といった不可視なもので、物質的な存在、実体を持たないものというように捉えてもよいのか、これは若干疑問が残るところです。「プドガラ（輪廻の核となる人格的な主体）」というのは、「命」と訳されることもありますが、基本的には「体」入れ物のことです。疑問の残る点ですが、これに関しては、部派仏教での主張が異なるなど明確な結論が出ていないので、今日はここまでにしておきます。

ここで、一般的な辞典として『広辞苑』では「精霊」をどう説明しているのか確認しましょう。順番的にこちらを先に見るべきでした。さすが『広辞苑』です。『仏教辞典』や『文化人類学辞典』のような専門的な辞書からは少し離れて、両辞典の良い箇所だけを切り取っています。具体的には「①草木・動物・人・無生物などの個々に宿っているとされる超自然的な存在。②肉体または物体から解放された自由な霊、死者の靈魂」とあります。ただ、『広辞苑』は普段私たちが使っている言葉の意味をまとめ上げていく辞書ですので、これでいいわけです。また「③万物の根源をなすという不思議な気。霸気。」とも説明されています。「霸気」と聞いても想像しにくいとは思いますが、ここでの「霸気」というのは「生氣」＝「生きる力」だと言い換えられます。①の特徴としては、無生物も含まれているということです。③は仏教的な価値観に最も近いと思いますが、「精霊（ショウリョウ）」という漢字の説明で、「霊」という漢字を使用してよいのかという気もしますがどうでしょうか。

①の「超自然的な存在」、自然界にありながら、自然の摂理を逸脱している超自然的なもの、これが何かというと、私たちがよく使う言葉で言うならば「アニミズム（祖霊信仰、animism）」です。この「アニミズム」という概念を唱えたのは、『原始文化（Primitive Culture）』という著名な著作や原始宗教についての著作を

出版しているイギリス人の人類学者エドワード・バーネット・タイラー (Edward Burnett Tylor、1832-1917年) です。定義としては、「自然界のあらゆる事物は、具体的な形象を持つと同時に、それぞれ固有の靈魂や精霊などの靈的存在を有するとみなし、諸現象はその意志や働きによるとみる信仰」とタイラーは提唱しています。彼はキリスト教を基にしていますので、靈的存在=靈としての存在ということで、ここで「ショウリョウ」という言葉に対応する原語として「スピリチュアル (spiritual)」という言葉や「ソウル (soul)」という言葉を使っています。Soul and spiritual, Spirituality existenceこのような言い方をしています。ですので、ここで「ショウリョウ」を認めると、キリスト教の三位一体の「ショウリョウ」と被ってくるわけです。そのため、ここで靈的存在として訳している「Spirituality、スピリチュアリティ」という言葉をつくることによって、三位一体で使われるキリスト教の神、と同等の位を有する「セイレイ Holy Spirit」とは区別していることとなります。そして、同じような存在としてあるもの、それが自然界のあらゆる事物に宿っている、とみるわけです。そして、その現象は意志や働きによる、ここの表現は面白いです。「現象はその意志や働きによる。」これは当たり前のことです。私たちの活動も、すべて意志または自分たちの行動によって成り立っているので、その意味ではこの表現にまったく違和感はありません。

時代が少し下り、今度はマレット (Robert Ranulph Marett、1866-1943年) という研究者が現れます。自然界の様々な事物に対して、タイラーは「アニミズム」と表現して、それぞれに靈的な存在を個々別々にもとめたのですが、それ以前の段階を想定したのが、マレットです。原初的な自然崇拜、これをアニマティズム (animatism、プレ・アニミズム pre-animism、ヴァイタリズム vitalism、ダイナミズム dynamism などとも言われる) といいます。「自然界の事物に靈的な力や生命力が秘められており、この力を生活に取り込もうとする信仰。これをプレ・アニミズム (アニミズムの前段階) と位置づける」考えです。現代のスピリチュアリズムは、このアニマティズムの考え方と比較した方がしっくりする気がします。イギリスで語られているスピリチュアリズムという考え方は、このアニマティズムという概念の流れによっているのではないかと考えます。それに対して、タイラーの考え方は、東洋的なアニミズム、自然崇拜信仰です。それぞれの事物にそれぞれの心が宿っており、その心が不可視の状態が存在する時もあり、時には現れたりもする、というように私たちに影響してくると考えるのが、タイラーの提唱したアニミズム

です。ただ、今の段階で、これらを区別することはできません。最終的には、文化人類学的、エスニカルな考え方からみるのであれば、アニマティズムとアニミズムの二つの傾向が出てくる。アニマティズムは、より原初的なものとしていますが、自然界の力を一つのものとして捉える。それに対して、アニミズムは、自然界に個々の力が別々に宿っていて、それぞれが私たちに働きかける、もしくは私たちからもアクセスできる。そういった違いがあるということを理解して頂けたらと思います。

## 5-1. 東南アジア大陸部の精霊信仰

さて東南アジアには民族、というより部族と呼んだ方がよいかもかもしれませんが、多種多様な文化を持つ人々が住んでいます。この点を踏まえて、東南アジアの国や地域ごとの「精霊」を見ていきます。この中で仏教国はタイ、ラオス、ミャンマー、カンボジア、ベトナム、シンガポールとなりますが、ベトナムとシンガポールについては今回割愛させていただきます。なぜならば上座部仏教圏と大乘仏教圏（ベトナムとシンガポール）では、文化的土壌がまるで違うので同じレベルで語れないからです。ベトナムは北に行けばいくほど国境を接する中国仏教の影響が強くなっています。ベトナムの南方地域では中国仏教の影響もありますが、最南部に行くとヒンドゥー教の影響も入ってきます。シンガポールは華人優位の世界なので、完全に中国仏教の影響下にあります。シンガポールにも上座部の瞑想センターがありますが、現地の上座部仏教圏の人々よりも、ヨーロッパやアメリカ、オーストラリアの人たちが訪れることが多い、というのがシンガポールの仏教事情です。余談ながら、シンガポールでは僧侶が共済を作っていて、信者さんたちに共済に入るのを勧めています。そして信者さんが病気になったりすると、共済で治療費を負担したり、僧侶が言わばソーシャルワーカー（社会福祉士）として、社会復帰のための手助けをするシステムができています。同じようなシステムは、台湾でも類似した活動を見ることができます。このように、日常の中で関わる仏教界の動きは、今後の日本仏教にとっても重要なファクターになってくるのではないかと思います。

では今回のメインとなるのは大陸部のミャンマー、ラオス、タイの宗教文化についてです。カンボジアはタイやラオスに比較して精霊のとらえ方が少し異なります。タイとラオスではほぼ共通しており、ミャンマーはタイやラオスに比べて独自の展開をしていますので、そこで上記の3カ国の精霊文化を2つの視点から取り上げて

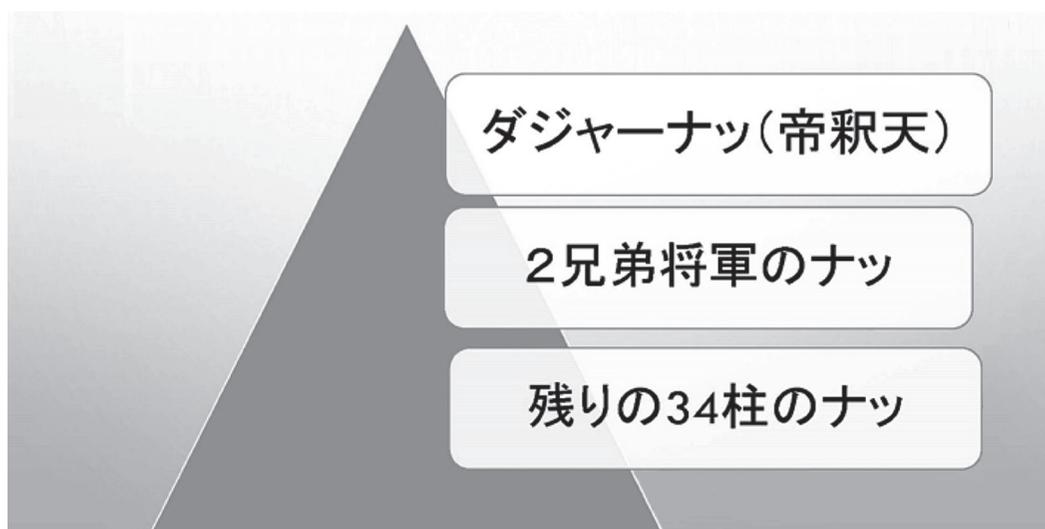
いきます。島嶼部のマレーシアやフィリピン、インドネシアのスマトラ島やスラウェシ、カリマンタンなどは島によって全く異なる宗教文化があります。例えばスマトラ島には大乘仏教の古い形態が残っていたり、大乘仏教と密接に関係した民間信仰があったり、バリ島では独自の密教が信仰されていたりと大変興味深い事例があるのですが、これは次の機会の折にでもご紹介します。

## 5-2. ミャンマーの精霊信仰

まずはミャンマーについて見ていきます。タイとラオスは同じくタイ・カダイ語族に属しているため8割くらい言語上の発音に同一性が見て取れますが、ミャンマーは、その2カ国とは言語が全く異なり、チベット・ビルマ語派に属しているため、近接している国ですが、言語上の親縁関係は見られません。ミャンマーでは精霊のことを「ナツ (Nat)」といいます。このナツが庶民の間で篤く信仰されています。これはビルマ族だけではなく、ミャンマー連邦共和国5100万人を構成する多くの部族にこのナツという精霊に対する信仰が現在も息づいています。では、歴史的背景を見てみましょう。

11世紀の中葉に全ビルマを統一したパガン朝のアノーヤター王（在位1044-1077年）、この王はそれまでの様々な宗教を排除します。ナツも民間宗教の形態の一つですが、その他に例えば実態はよく分かっていませんが、仏教、とりわけ密教とヒンドゥー教が融合したような混淆宗教を担い、何故か、ミャンマーにだけ存在したアリー僧という一団がおりました。このアリー僧は、クメール（現在のカンボジア）にも影響を与えたとも言われています。また一神教のような宗教も当時ミャンマーに流入していたようで、そういった様々な宗教を一掃して宗教的に安定したものを作るという願いから、1056年に南方のタトン王国を攻略した際、シン・アラハンを上座とする500人に及ぶ上座部仏教僧をパガンに移住させ、それによりミャンマーに上座部仏教が根付いていくこととなった、と歴史上いわれています。（タトン王国も現在のミャンマーの一部だったので、パガン王国が歴史的にビルマ族の国としての源泉となっているのです。）しかし、実際にそれまでの信仰形態をすべて排除できたかという点、それはできなかったようです。アリー僧などは、この出家集団を追い出してしまえば済むことだったので、比較的簡単だったのですが、当時の民衆の間に信仰されていた、ナツのような信仰形態は排除できなかった。それならば仕方が無いということで、アノーヤター王は逆に代表的なナツをまとめ

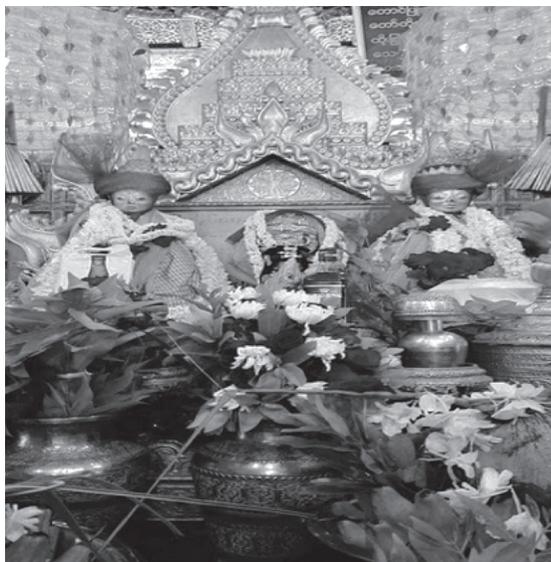
て37柱（ナツを数える単位）としました。私たちも、ご遺骨を一柱、二柱と数えたりするのと同じです。さて、そのまま放っておくと以前のナツ信仰に戻ってしまうので、その最上位に仏法の守護神である帝釈天を据えて、ダジャーナツ（帝釈精霊）と呼び、「上位精霊（アテナツ）」としました。何故帝釈天としたかということ、帝釈天にはたくさんの眷属である神々がいて、天邪鬼のような邪鬼を押さえ込む力があるので、ナツがとんでもない要求をしてこないように、民衆を惑わしたりすることがないように、仏法の守護神である帝釈天をトップに据えて、それ以外を「下位精霊（アウツナツ）」として、精霊を崇める精霊信仰よりも、上座仏教の信仰の優位性を示し、精霊信仰と上座仏教との関係を構築しました。それ以降、歴代の王たちによってはナツの顔ぶれが変わることはありましたが、37柱という形態は変わりませんでした。なぜ顔ぶれが変わるかということ、これが実に簡単な理由で、時の王も実のところナツに対する信仰を捨てきれていなかったもので、自らが信仰するナツを37柱に入れて、前王の信仰していたナツがあればそれを除いてしまう、ということが何回も行われました。このように12世紀以降、ダジャーナツの最上位は変わりませんが、時の王たちの権力構造や地域性において36柱に変化がありました。しかし、19世紀以降は変化がありません（具体的には『上座仏教事典』366頁を参照）。ナツに対する信仰は37柱という形で出来上がってきましたが、それは具体的にどのようなものかということ、以下の図のようになります。下の図1か



【図1 バンテオン（宮殿）】

ら見ていきます。

この図がパンテオン（宮殿）を模したものになります。最上位にダジャーナツつまり帝釈天、次に、右図の同じような顔つきの2人のナツですが、これはアノーヤター王が結婚する前にすでに授かっていた2人の兄弟、この兄弟は帝釈天のすぐ下の地位にいる精霊であり、精霊としてはトップの地位にいます（図2）。



【図2 タウンビョン村の2兄弟精霊】

それだけ、アノーヤター王が建国し

たバガン朝が、歴代の王たちのモデルとなっていることがわかります。そのバガン朝を支えたといわれているのが、2人の兄弟です。この2人は軍事的にとっても優秀で、将軍にまで上ります。しかし、毒殺されてしまい、王朝を守り切れなかったという慚愧の想いで精霊になったとされています。ここが重要であり、精霊になるのは偉人だからではなく、死んだ際の念いがどれだけ強いのかによって精霊としての働きが備わるかどうかが決まるのです。考え方が日本の幽霊に少し似ています。大きく異なるところは、日本の場合は、念い＝恨み辛みがその世界に残ろうとする意欲となって幽霊となることが多いですが、ミャンマーの場合はもう少し明るく、やりたいことを成し遂げられなかったという後悔によって精霊になっていくというわけです。図2のナツが祀られている旧都マンダレー近郊のタウンビョン村は、普段は静かで穏やかな村ですが、ひとたび精霊を祀るお祭りが始まると、人口5000人程度の村に1週間で50万人以上の人押し寄せます。それだけ精霊信仰がミャンマーの人々にとって重要であり、タウンビョン村が精霊信仰の最重要地の1つであるということを理解していただけたらと思います。

もう1つ、ナツ精霊信仰の総本山がポッパ山です。こちらに祀られている精霊は先ほどの2兄弟とは異なります。有名な精霊は、マハーギリ（優秀な商人とその妹）です。ポッパ山というのは、ナツ信仰の総本山ということもあり、精霊を信仰している方は必ず巡礼する場所となっています。この2つのナツ信仰の相違について簡潔に表現するならば、タウンビョン村はお祭りの時に人が訪れる、一方でポッ



【図3 ホッパ山のタウン・カラット内部の34精霊が祀られている礼拝堂】

パ山（標高1518m）のタウン・カラット（標高737m、小ホッパ山）へは年間を通じて信者が参詣します。

図3の写真は、横並びに祀られているナツ精霊です。ミャンマーの面白いところは、日本人は現世をハレの世界、死後の世界を穢れの世界と認識している人が多いのですが、ミャンマーの人は「穢れ」という概念では捉えてはおりません。とてもカラフルな衣装で祀られているのもそれが理由です。そして、金色の顔をした像が何体かありますが、実は、人気のある精霊は、礼拝した人の布施で金箔が貼られます。これは、像を作製する段階ではなく、あとから信者さんが、願い事が叶ったお祝い・お礼として貼っていきます。では、お祭り自体がどれほどの賑わいかというと図4のような状況です。

賑わいの中心は、ダジャーナツ（帝釈天）よりも2人の兄弟の方が人気です。ミャンマーに限らず、タイやラオスなどでもそうですが、金箔を貼るという文化は共



【図4 タウンビョン村の祭礼時の賑わい】

通しているものの、一番顕著に現れている国はミャンマーです。また、この写真から分かるように、前方にいるのは男性が多く、女性はほとんどいません。ミャンマーは、かつての日本のような男尊女卑の考えが根強く残っています。

ですから、女性はお寺の中に入ることができる場所に制限が設けられています。ところが、ナツ



【図5 ナッカドーの踊り】

エー祭には、普段では入れないナツを祀っている神殿の内部まで女性も入ることができます。これもナツエーの特徴となります。これはのべつ幕なく行われているわけではありませんが、日本においても我々僧職がいるように、ナツを祀る宮殿においても取り仕切る者がおります。それが図5の写真に写っている人物です。

この人物はナッカドー（カドーがダンサー・踊り子という意味）と呼ばれます。精霊を祀る踊りを行うのですが、特に決

まった振り付けなどはないので、私から見たら、太ったおじさんが酔って踊っているようにしか見えません。ですが、ただ酔っているわけではなく、ちゃんとした理由があります。手前にいる信者の方たちが、このナッカドーに意図的にお酒を飲ませます。そうすることでナッカドーが3つの状態になります。彼等はダンサー（カドー）であると同時にシャーマン（Shaman、呪術者）でもあります。ここで、日本におけるシャーマンと比較してみます。日蓮宗を例に取ってみると、修法師さんたちは自分たちが依り代となることはありません。依り代となってしまった人、または意図的に依り代の機能を持つ人に対して修法（五壇法）を行い、何か憑いてしまっているものを守護霊化させることを目的に祈祷をします。ナッカドーも目的は同じですが、彼等は自らを依り代とします。これが1つめの状態、憑依です。2つめの状態は脱魂です。3つめは、預言のような状態。これが、ナツエーの特色の1つでもあり、信者さんたちが集まる理由の1つです。以上のことをまとめると次のようになります。ナツの階層構造として、一番上にダジャーナツ（帝釈天）、次に2兄弟将軍のナツ、最後にそれ以外の34柱のナツがきます。ところがダジャーナツに関しては、実はあまり人気がありません。なぜかというとなり願いを叶えてくれないからです。2兄弟のナツはかなり人気があります。ただ、この2兄弟は戦に関してのナツです。昔のように戦の多い時代では重用されましたが、現代においては以前ほどもてはやされることがなくなっています。他の34柱のナツをみると、商売繁盛や病氣平癒などが人気となっています。そして、このナツを呼び寄せ、お願いするときの仲介役として、先ほどのナッカドーがでてくるのです。

図6の写真は、女装している男性たちのナッカドーです。この人たちのことをメイマシャー（女装の男性）と言ひ、ナッカドーにはメイマシャーが多いのです。なかには正真の女性もいますが、多くは男性です。この傾向は、インドでも同じように、ハリジャン（神の子）の祈祷師（両性具有者）が、神を祀る祭りのとき、悪霊を追い払うときなどで必ず出



【図6 メイマシャーの祈祷】

てきます。このように、この種の人たちの共通点として、男性と女性の境界域にいる、と同時に、自分たちの現実世界と自分たちを受け入れてくれる理想世界との境界域に上がります。そういった意味では、彼等は精霊に近い存在であると見なされているのです。したがって、奉納者、信者たちは、ナッカドーを酔わせることで精霊を憑依させ、ナッカドーを通じて商売や家族の吉凶・健康問題など精霊に預言を求めて集まってきます。特に、ナツの中でも有名なのがドーチャーというナツです。こちらは商売に長けたナツですので、個人事業主の方から人気が高くなっています。そして、願望が満たされた場合は、願主が個人としてナツを祀る祭ナツプエーを催すことが徳の高い行い、善行とされています。つまり、現世安穩だけではなく、後生善処も約束されていくということになります。これもナツプエーを催す大きな目的の1つとなります。これによって、願主が与えるものも多いのですが、得られるものも多い。ナツにしても、与えるものも多いが、自分たちがナツプエーを催してもらうことで得られるものがある、と勝手に解釈していますが、ギブ&テイクのwin winな関係が築けていると考えるわけです。では、願望が成就できなかった場合はどうするのか。実は、また別のナッカドーのところに行きます。彼等は、願いを叶えてくれる、言い換えると、精霊の言葉をより正確に伝えることができるナッカドーのところへ集まります。日本では、「ここのお上人に祈願してもらえれば成就するかも」という「誰々ありき」から始まりますが、ミャンマーの場合は、「成就ありき」から始まります。ですので、お伺いをたてるナッカドーは都度かわっていくのです。

ミャンマーのナツ信仰についてまとめますと、ナツとは、過去に変死や横死など

により願望や目標があったにも関わらず、非業の死を遂げた人の魂のことを言います。そしてその魂が現世に留まり、目に見えない状態で作用している。つまり、ナツと呼ばれるのは、単なる魂ではなく、その魂が現世に留まり目に見えない状態で我々に作用してくるものを指します。そして特定のナツに対して、慰撫を目的として供養することで、そのお返しとして、現世利益が与えられる。ここからが重要で、一度ナツと関係を結ぶとそのナツへの奉仕から逃れられなくなります。ナツの言葉を伝えるナツカドーを変えることは出来ても、ナツへの信仰は終生続いていきます。もしくは、よほど大きなナツプエーを催さなければ、関係を絶つことはできません。ミャンマーは、仏教徒が約90%、ナツに対する民間信仰が約5%、キリスト教が2%、残りがその他となっています。数字で見るとナツに対する信仰が少ないように見えますが、表面では上座仏教を信仰しながら、平行してナツも信仰しているという人は少なくありません。これは、私たちがよく知っている信仰の形態から考えた場合、日本の神道もしくは日蓮宗で考えるならば神様に対する考え方によく似ています。つまり、利益と厄災の両義性があるということです。このナツはどちらかであると考えてのではなく、利益を与えてくれるが、そのお返し、奉仕を怠るとその逆のことが起こりえます。そういった意味では、日本の神道の中でいう荒ぶる神のような、菅原道真など荒ぶる神となっていたプロセスと似ているところがあります。

ナツ信仰についてももう少し見てみましょう。**図7・8**の写真をご覧ください。**図7**はカレン州にあるナツを祀っている祠の写真です。この州はキリスト教徒が多く住んでいる地域ではありますが、このようにナツの信仰を伺うことが出来ます。次



[図7 カレン州の祠]



[図8 ナツ精霊の祠と巨樹]

に右の図8の写真、こちらはマンダレー宮殿前の祠になります。こちらの木をよく見ていただくと根元に小さな紙が貼られていることにお気づきでしょう。これは金箔が貼られた部分です。つまり、精霊ナツに対する信仰のもう1つの形態として、マッタカニズムという大きな木に対するアニミズムの一種である樹木（神木）信仰もあります。このような大きな木の下には、必ず大きな力をもった精霊が宿るというのです。この点は、日本のアニミズムと同質性があります。

上座仏教とナツとの関係は、基本的に非寛容です。バガン朝初代の王であるアノーヤター王（1044-1077年）は、それまでの土着信仰を禁止しました。しかし、精霊信仰の禁止には失敗し、現代まで続く37柱のナツを位置づけることで、信仰の形態を上座仏教の中に取り込んだことになります。そして、この信仰は村落よりも都市部での信仰が根強いのです。たとえば、ウー・ミンジョーです。このナツは、非常に商売に長けたナツと言われています。ある女性の話ですが、その女性は早くに夫を亡くし、商売が上手くいかないということで、ウー・ミンジョーのところに商売繁盛を祈願しに行きますが、なかなかうまくいかない。ということで、この女性がどのような行動に出たかということ、ウー・ミンジョーと結婚しました。「精霊と結婚する」と聞くと違和感があると思いますが、ナッカドーの中でもとくにメイマシャーは、男性の特徴を持ったナツと結婚します。そうすることによって、メイマシャーはシャーマンとして非常に強い力を得ることが出来ます。結婚することで、ナツの力をすべて自分が受け継ぐことができ、また憑依されやすくなり、ナツの言葉を願主に伝えることがスムーズになると信じられています。先ほどの女性は、ウー・ミンジョーと結婚して20年経ちますが、商売は上手くいっています。ミャンマーにおいて、ナツに対する精霊信仰を持っている家は、証としてココヤシの葉を家に飾っています。そして、先ほども言いましたが、ミャンマー人のキリスト教徒やイスラム教徒までもがナツを信仰しています。つまり、帝釈天や神などを上位においた上位概念の宗教を選ぶ必要が無いほどに定着していることがわかります。

ミャンマーの「ナツ」に関する信仰は以上で結ばせていただきますが、その他にミャンマー人にとってもう1つ重要な信仰が存在します。それはウェイザー信仰といます。これは、一種の超人信仰で、合い言葉は「トゥエヤツパウ」といいます。この言葉はビルマ語です。この信仰は、特別な修行をして超自然的力を得た人物のこと、または目指している実践のプロセスのことを「ウェイザー」といいます。具体的には、特別な知識や術、ここでいう術とは錬金術のことで、これを持っている

こと。そして、この術が究極であること。つまり秘術としてその人物しか体現することができないという意味です。以上のことが完成することによって、超自然的な力が備わっていると定義されています。そして、その結果としてウェイザーとして長寿が得られる。場合によっては不老不死とも言われていますが、これに対して特に根拠はありません。

具体的に見てみましょう。図9・10は著名なウェイザーです。図9の写真はポーボーアウンといいます。19世紀初頭に存在したというポーボーアウンは出自も良く、衣装は白の衣に肩掛けをし、王族のような帽子を被っています。では、どこが超人的だったかという、優秀な戦略家でありました。彼が立てた戦略で負けたことがなかったことで、ウェイザーに違いないと思われたわけです。一方、図10はポーミンガウンといい、外見は「フーテンの寅さん」にしか見えません。写真をよく見ると、床に多くのお金が散らばっています。これはもちろんお賽銭です。これを見てもポーミンガウンの人気度が伺えます。この2人は実在していた人物です。ポーボーアウンについてはミャンマーの教科書でしか解りませんが、ポーミンガウンは実際に見たという人がたくさんいます。彼の逸話は多く残っており、例えば、錬金術を使っていた、財布からお金を出し続けてもなくならなかった、動物に吠えられてもひと睨みで逃げていってしまうなどがあります。では実際に、ウェイザーは何ができた、と語られているのでしょうか。

- ① サマと呼ばれる呪符を使い護符を作った
- ② 民間療法の薬を作ることができた。(日本においても、鑑真和尚以来、僧侶である医者(僧医)という概念が根強く残っています。特に、中世平安時代では、僧医は100%医者 の代わりとなり、薬剤の知識も豊富でした。)



[図9 ポーボーアウン像]

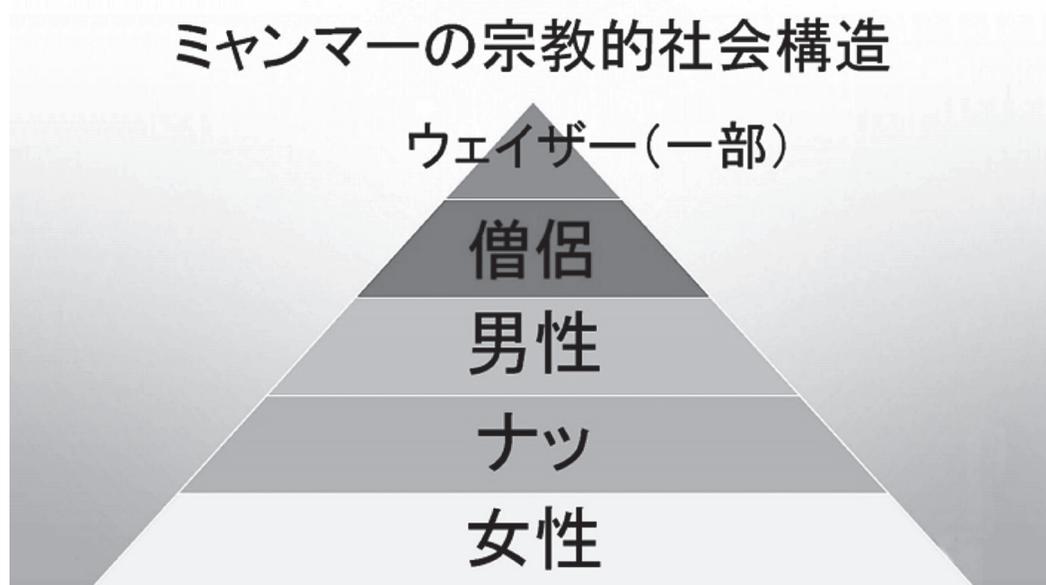


[図10 ポーミンガウン像]

- ③ 錬金術、特殊な術を用いて金銀を作り出す。
- ④ 占星術、未来を占うことが出来る。
- ⑤ 適切な瞑想を施してくれる。

以上の5つの力を備える必要は無く、どれかの特長を有していれば、ウェイザーとして認定されます。では、ウェイザー（ビルマ語、weikza）とは何か。パーリ語ではヴィッジャー（vijjā、明知）、サンスクリット語ではヴィデゥヤー（vidyā）、密教では明呪と言います。原初的な意味では分別される知恵と訳されています。また、ウェイザドー（weikzado）というウェイザーがさらに高次に至った者もあります。そしてウェイザーになるためにはトゥエヤツパウが必要となります。これは、「上に突き抜ける」という意味で下では意味がありません。トゥエヤツパウには2つの状態があり、1つはアティトゥエツ（死んで突き抜ける）もう1つは、アシントゥエツ（生きているときに突き抜ける）という意味を持った言葉が使われています。そして、一般民衆はウェイザーに対して「あの人はウェイザーだ」とは言いません。ましてや、本人を前にして「ウェイザー」の言葉を使うことはありません。俗人からウェイザーになった人はボードー（bòdaw、御祖）と呼ばれます。また、僧侶がウェイザーになる場合もあります。ウェイザーとなった僧侶のことはバパパヤー（hbáhpāya、父なる僧正）と呼びます。

これを踏まえてミャンマーの宗教的な社会構造は、**図11**に示したようにウェイ



[図11 ミャンマーの宗教的社会構造]

ザーが最も上位となり、その中でもウェイザドーが最たる者となります。現在生きている人でウェイザーといわれている人は残念ながら1人もおりません。そして、それを目指す一番近いところにいるのが僧侶です。そしてその次が男性、次にナツが位置します。ナツは強い力を持っていますが、制約される場面が多く、精神的な階次が高いわけではないので、男性よりは下となります。そして一番下に女性がいます。では、このような社会構造の中にあるウェイザーはいつ頃から信仰されているのかというと、実は明確には判っておりません。気が付いたらすでに存在していました。確認出来る範囲では、18世紀末頃までは遡れますが、まだ200年ほどの歴史しかありません。ここまでは、ミャンマーにおけるナツとウェイザーへの信仰を見てきましたが、次に、タイ・ラオス・カンボジア文化圏の精霊（ピー）について概観します。

### 5-3. タイ、ラオスの精霊信仰

この精霊ピー（Phi）はタイとラオスに共通します。カンボジアではネアック・ターと呼ばれ少し異なりますが、紙数の関係上本稿では触れません。ピーとは、精霊・妖怪・霊など、基本的には日本語の精霊（ショウリョウ）と同じように多様な意味を持ちます。これは、仏教伝来以前から存在するアニミズムを基盤としている考え方です。ピーの中でも、土地に依るピーについては、カンボジアも含めて共通しています。それでは、精霊がさらに分化して信仰されているラオスのピーについて解説していきます。

1527年に、ランサン王国のポーティーサラ王（1501-1547年）はピー祭礼の禁止を布告しました。しかし、失敗に終わりピー信仰が衰えることはなく、今現在ラオスの人々は何かある事にピーを話に持ち出します。例えば学校に遅刻した理由として、「昨晚ピーに襲われて頭痛が酷くて……」といったところです。ラオスでは、この言い訳で通用します。一般社会において認識されているピーはこのように位置づけされます。ピーは、家族や共同体、村落など所属している社会性によって呼ばれ方が変わってきます。家や個人のピーはサンバブーン、土地や共同体のピーはピーブーター、村落のピーをピーバーン、そして国、私たちの感覚では都道府県としてのピーをピームアンと言います。このように4種に大別されるのが、土地に対するピーであります。そして、サンバブーン以外の3つのピーは、社会的地位のあるピーとして私たちを守護してくれるというのが現地の人の考え方です。



サンバブーン（各家のホーピー）

[図12 各家に奉られているピーの祠]

図12は、サンバブーンです。これらはホーピーといい、祠、つまり「ピーの家」という意味です。それぞれ趣向があり興味深いです。色も違えば形も異なります。ただ共通しているポイントとして、館です。勾配の厳しい屋根が特徴的ですが、これはクメール様式と呼ばれる建築様式のミニチュア版です。この図12の左2つのホーピーはルアンパバンにあり、ラオスでも北の方に位置します。しかし、その地域の寺院を見てみると屋根の勾配は急傾斜から緩やかな傾斜へと連なっています。つまり、ラオスの北方の伝統的家屋の屋根に見られる勾配はルアンパバンのホーピーの作り方に反映されていません。このことから、ホーピーの慣習は南から伝来してきたのではないかということが言えるでしょう。お供え物に共通するものはなく、多種にわたっているので、定形は無いと思います。

次に、図13のピーバーンと図14のピーブーターを見ていきます。図12のホーピー



ヴィエンチャン郊外

[図13 ピーバーン]



ルアンパバン市街

[図14 ピーブーター]

## ヴィエンチャン郊外



【図15 ピームアンの祠】

一との違いは、大きな木の下に祀られていることと、家の門前や玄関前などではないことから独立した祭壇ということが理解できます。しかも、それなりに供物が供えられており、固定の信者がいることが判ります。

最後にピームアンです。図15の写真の道路は国道で、この巨木の辺りが県境となります。その木の下に小さな祠が見えます。この祠に祀られているのがピームアンです。もっとも大きな力を有しているピーのはずなのですが、供え物は決して多くありません。むしろ、少ないと見えます。守護の範囲が大きくなりすぎて、定例の祭礼時以外にホーを管理する者がいないのです。しかし、我々の感覚でいうと、氏神様に似ているといえるでしょう。そう見てみると、精霊の祀り方にはアジアで共通しているものがあるように感じます。以上、土地にまつわるピーについてご理解いただけたことと存じます。

次に、ピーを操る祈禱師についてみていきたいと思えます。このピーを操る祈禱師のことを、タイ・ラオス語ともにモーと言います。そして、男性の祈禱師をモーポーン、女性の祈禱師をモークワンと言います。彼らモーがいないと、いるはずのピーの存在を認識することは出来ません。モーが行う儀礼などを通じ、善いピー（ピーディー）や悪いピー（ピーハイ）、男鬼（プートピー）や鬼女（ピーサート）らと感応道交することによって、彼らの不満やニーズを救い上げる役割として、モーポーンとモークワンがいるわけです。中でも、モーポーンは、ほとんどの者が出

家修行を経験しており、それは一時的な修行ではなく、少なくとも20歳を過ぎてから数年間修行をしている者、単なるピクではなくテーラと呼ばれる者が還俗してなることが大半です。このような経験を積んだモーポーンが執り行うことができる儀礼としてもっとも有名なものがバーシー・スー・クワンで後述いたします。

次に、ピーの作用とクワンの関係について見ていきます。クワンとは、我々が使う言葉では魂が近い言葉です。ただ大きく異なる点として、一般的な我々の考えでは、魂は1人の個体につき1つですが、ラオスでは体の32ヵ所にそれぞれ魂(クワン)が宿っており、そのクワンによって生命力がもたらされていると考えられています。ピーは外因、クワンは内因を表します。そして、幸福状態が続けば変化がなく、無病息災でいられる。つまり、外因もなく、内因も何もない、言い換えると、クワンが適切に働いているといえます。そのクワンに対して、ピーからの働きかけやクワンを自分でコントロールできなくなる、例えば酔っ払ってしまう=不徳行為を行ってしまうと、クワンが体から離れてしまい、生命力(生氣)が弱くなり、病気や事故に遭いやすくなると言われています。それを解決するためにはどうすれば良いか、それは身体から離れたクワンを呼び戻すことが必須になります。そして、そのために行う盛大な祭礼がバーシー・スー・クワンなのです。詳述します。クワンは弱くなると栄養を貰えなくなるので、体の外へ出て行きます。そうすると、ピーサートのような悪霊がそのクワンを自分の中に取り込み、またそれが次のクワンに働きかけていくという循環が発生します。人々は、この循環を嫌うために自分の中のクワンを適正に保とうと定期的に行うものが、バーシー・スー・クワンという儀式になるのです。この儀式には2つの目的があります。1つはハレの目的(結婚式などの冠婚の祝い事、増益祈願、願満祈願など)です。もう1つはケガレの目的(弱ったクワンの保護と呼び戻し(スー・クワン)、活性化を祈る)です。そして、バーシーというのは、儀式の際に着用するダーイ・サーイ・シンを手首に結ぶことをそう呼んでいます。これは、目的が達成されたら外してもよいのですが、最低3日間は着用しておく必要があります。ミサンガなどによく似ています。ただし、カラフルなミサンガとは違い、ダーイ・サーイ・シンは真っ白です。

この図16の写真は、バーシー・スー・クワンが始まる直前の様子と準備をしているモーポーン(祈祷師)です。図をよく見てもらうと分かりますが、奥に座っている参加者たちが肩からかけている白い袈裟のようなもの、あれは、ラオスにおける公式な儀式の際に着用するパーピヤーンというものです。わたしたちでいう信徒

袈裟とみなして構わないでしょう。

では最後にこちらの図17の写真を見てなにか気付くことはあるでしょうか。高座上に座っているのは禅定印の釈迦仏像です。この手前に並んでいるもの、じつはこれ手提げ供物籠です。マリーゴールドとバナナの葉っぱで作られています。菩提樹ではありませんが、現地の方は菩提樹だと言い張っていました。釈迦仏の前で立っている方、性別は女性でメイトラニーといいます。瞑想中のお釈迦様を洪水から救ったとされており、我々の感覚だと観音様に近いといえます。また、上にお釈迦様、その下に精霊にも見える観音様、この地域の宗教的なヒエラルキーを表しているようにも見えます。



〔図16 バーシー・スー・クワンの祭壇とモーボン〕



〔図17 聖樹と釈尊像、メイトラニー像〕

では、実際図17の写真から何を読み取ることが出来るのか。まず、手前の石段は釈尊の像が造られる最初からあり、後ろに見える大樹の幹の部分に注連縄が巻かれています。これらの像は、お寺の敷地中にあります。イメージし易い例を挙げるならば、山梨県身延町下山の上沢寺の境内にあった逆さ銀杏の木が近いと思います。つまり強い精霊が宿っているとされている場所、そこに対して上座仏教の傘が被っているわけです。これが何を表しているか。精霊を信仰する土着信仰の上に、上座仏教の象徴である釈尊像や、精霊と釈尊とを結ぶ役割としてのメイトラニーの像を据えることによって、布施の功德を積むのです。手前にある小さな手提げ供物籠がホーピーで、それぞれのピーを祀っているものです。こちらの円形の石段を真上から俯瞰視したときに中央にいくほど力をもつという構図にも見えてくるわけです。

このような大樹信仰は、ラオスのお国柄をよく表しています。ミャンマーにもこの種の構造はありますが、ここまでのものではありません。なぜかという、ラオスは内陸国で、森林資源が非常に豊かであるため、まず前提に大樹信仰＝アニミズムがあって、その上に上座仏教の傘が被さるようになっているのです。このようにいくつかの信仰が複層的に重なり合っていくことをシンクレティズムといい、まさしくその形態がひと目でわかるようになっている事例なのです。

## 6. 結 び

上座仏教は、東南アジアの仏教国中で公然とした形では優位性を保ち、形式上はその地に根づいている土着信仰とは交わりません。先ほど述べたように、ピーを祀るようなバーシー・スー・クワンを催しても、そこに僧侶はいません。そして、式が終わると僧侶が入り、メッター・スッタ (mettā-sutta、慈經) などの経文を誦し、バーシーなどの紐を参加者に結んであげたりもします。ただ、女性の身体に触れないという戒律から女性の手首に結ぶことはありません。在家者の要請に応えるために、暗黙にピーを祀ることを受け入れている証拠ではないか、ということでもめさせて頂き、私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

### 参考文献

- 肥塚 隆 責任編集『東南アジア』アジア仏教美術論集、中央公論美術出版、2019年。
- 『上座仏教事典』パーリ学仏教文化学会上座佛教事典編集委員会編、(株) めこん、2016年。
- 中村羊一郎「ミャンマーのナツ信仰とナッカドー：タウンビョンとヤタナグの祭りを通して」静岡産業大学情報学部研究紀要17巻、1-31頁、2015年。
- 立川武蔵編『アジアの仏教と神々』法蔵館、2012年。
- 加藤 剛編『変容する東南アジア社会』(株) めこん、2004年。
- 土佐桂子『ビルマのウェイザー信仰』勁草書房、2000年。
- 田村克己・根本敬一編『ビルマ』河出書房新社、1997年。
- 周達観著、和田久徳訳注『真臘風土記』、東洋文庫507、1989年、平凡社。
- G. セデス著、山本智教訳『東南アジア史』大蔵出版、1989年。
- Paul T. Cohen ed. *Charismatic Monks of Lanna Buddhism*, Nordic Institute of Asian Studies, 2017, Denmark.

- Peter Skilling, *Similar Yet Different, Buddhism in Siam and Burma in the Nineteenth Century*, ed. by Forrest McGill, Emerald Cities Arts of Siam and Burma, 1775-1950 , 2009, San Francisco.
- Ikegami, Y.: *Comprehensive Report of the Project to Research and Restore Buddhist Statues in the Luang Prabang Area of LAO P.D.R, Sep/2001~Mar/2006*: 5 Vols, The Department of Museums and Archaeology, Ministry of Information and Culture of Lao PDR & The Research Institute of Eastern Culture, Minobusan University of Japan, 2007.
- *Friends of Khmer Culture* ed., Master pieces of the National Museum of Cambodia, 2006, Hong Kong.
- Carol Stratton, *Buddhist Sculpture of Northern Thailand*, 2004, Thailand.
- Karl Döhring, *Buddhist Temples of Thailand*, 2000, Thailand.
- V. Beek, *The Arts of Thailand*, 1999, Hong Kong.
- B. Gosling, *A Chronology of Religious Architecture at Sukhothai*, Monograph and Occasional Papers Series; No.52, 1996, Michigan.
- Dorothy. Fickle, *Images of the Buddha in Thailand*, 1989, New York.
- Robert E. Fisher, *Buddhist Art and Architecture*, 1993, London.
- A..D.T..E.Perera, *Crowned Buddha*, L.Prematilleke and others ed.,Senarat Paranavitana Commemoration Volume, 1978, Leiden, pp.166-169.
- A. B. Griswold, *Towards A History of Sukhodaya Art*, 1967, Bangkok.
- Jean Boisselier, *Tendances de L'ART Khmer*, 1956, Paris.
- G.Ceodès, *Bronzes Khmers, Ars Asiatica V*, 1925, Paris-Bruxelles.
- <https://locotabi.jp/kaigaizine/side-tourism-myanmar>
- <https://en.wikipedia.org/wiki/Mahagiri>
- <http://asia-Community.net/%e4%bc%9d%e6%89%bf%e3%81%a7%e3%81%82%e3%82%8b%e7%b2%be%e9%9c%8a%e3%83%8a%e3%83%83%ef%bc%88%e7%b2%be%e9%9c%8a%ef%bc%89%e3%82%92%e4%bf%a1%e4%bb%b0%e3%81%99%e3%82%8b%e3%80%8c%e3%82%bf%e3%82%a6%e3%83%b3/>
- <https://www.bing.com/search?q=%E3%83%9F%E3%83%A3%E3%83%B3%E3%83%9E%E3%83%BC+%E3%83%8A%E3%83%83%E4%BF%A1%E4%BB%B0&form=ANNT11&ref=55ff376606e241108852ffd6ee5121ca&sp=1 &q=AS&pq=%E3%83%9F%E3%83%A3%E3%83%B3%E3%83%9E%E3%83%BC+%E3%83%8A%E3%83%83&sk=PRE11&sc=7 -8 &cvid=55ff376606e241108852ffd6ee5121ca>
- <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/aoyama/seaclcul-2012-04-26-a.pdf>